

毒蛇济度 <sup>さいど</sup> 『善福寺縁起』より

## 善福寺

大谷派 山梨県大月市

もとは、天台宗。真宗の初代（開基）は源海といい（関東六老僧かは不明）、親鸞聖人甲州教化の際、弟子となり名を「唯圓」と改めた。善福寺の少し西に、甲斐の沼地として知られた葦ヶ池という地名が今も伝えられている。その面積は、葦ヶ窪郷の4分の1以上を占めたもので

あった。その地には現在「親鸞聖人毒蛇济度」の地として碑群が建立されている。

嘉禄2年（1226年）、親鸞聖人が聖徳太子御旧跡である勝沼町等々力・萬福寺に参詣し、その帰路この地の地頭であった小俣左エ門尉尚家が葦ヶ池にまつわる毒蛇济度の祈願を懇請した。

小俣左エ門尉尚家には「よし」という娘がいた。この娘は、行基が造った阿弥陀堂にたまたま京より来た断食修行中の僧に心を寄せたが、意の通じないことを悲しみこの池に投身してしまったという。そして、毒蛇に化けて近隣の通行人を困らせた。

親鸞聖人は懇願に応え、21日間小石に六字名号を墨書して池中に投げ入れたところ、「よし」の霊は



毒蛇济度

成仏济度されて観世音大士（菩薩）の姿となった。親鸞聖人が投げ入れた小石が白虎を帯びて先達となり、人々の驚き騒ぐ中を東南の空高く消え去って、遠く伊豆手石浜の「阿弥陀窟」に落ちたと伝わっている。

池には葦草が群れ、低地であったため葦ヶ窪の地名起源とも言われている。葦ヶ窪の地頭小俣左エ門尉尚家は、後に親鸞聖人の徳を慕って剃髪し、「唯念」と称して善福寺の2世となる。

当寺には「毒蛇济度」の名号石と毒蛇の鱗とされるものが伝えられている。それらの什物は、親鸞聖人の物語を継承し続けている。